

達人が教える 焚き火のABC

焚き火を極めた達人中の達人に、
焚き火のABCを教えてもらいました。
私たちの祖先が磨きあげてきた
木を燃やす技術はとも奥が深いのです。
何かホッとさせる焚き火の炎に、
日本の文化と豊かな自然が
きつと見えるはずですよ。

文 多田実
ルポルター・ジュライター
写真 瀬崎直俊



焚き火の達人・関根秀樹さん(左)と筆者。
夕闇迫る河原で焚き火を囲む、至福のひとつ



風に向かって縦の向きに長方形の掘り穴を掘る。風下側は垂直に切り、風上側からスロープを描くように形を整える



薪はナタで割って太さを調整する。慣れない人はナタの背を薪で叩きながら割ると安全。必ず木の台の上で割ること



針葉樹の薪(左)は焚き火の成長期に、広葉樹は安定期に。雑木(中)の薪でよいが、最高の薪はナラヤクヌギ(右)だ



下からマツの葉、小枝、極細の薪(針葉樹)と積み上げてから、少し持ち上げてマツチを入れる



細い小枝(左)は充分に集めたほうが良い。赤松の葉(右上)は点火剤として最高。スギの樹皮(右下)はよくもんで用いる



関根さんの焚き火七つ道具。ノコギリは薪の長さを整え、ナタやオノは薪割り用。火吹き竹は火の勢いが弱まったときに用いる

丹沢の溪谷へ

焚き火に行きましょう。

秋が深まると、溪谷から釣り師の姿が消えていきます。多くの釣り師から人気が高い岩魚や山女が禁漁期を迎えるからです。紅葉がもつとも美しく彩る季節に、谷川の河原は人影のない純粹な空間に変わります。そんな場所での焚き火を眺めていると、生活と仕事の日々の中で忘れていた本来の自分に帰れるものです。

でも、焚き火の基本的な技術やマナーを心得ていないと、火を起こせなかったり、逆に火を大きくしすぎて危険を招いたりしてしまいます。

そこで、焚き火の研究者であり、焚き火に関する著作も出されている関根秀樹さんに、焚き火の楽しみ方を実践してもらうことにしました。

「焚き火の初心者の方は、はじめは有料キャンプ場などで試みてみるのもいいでしょう。薪なども用意してくれますからね」

と、関根さん。ただ、都市近郊の有料キャンプ場は地面で火を焚く「直火」を禁止しているところが多いようです。灰や焼け残った炭などが見苦しいからなどの理由ですが、そういうところでは専用の焚き火台を貸してもらえます。

「直火の焚き火でも、火の扱い方がきちんとできれば周囲を汚しませんよ」と、関根さん。河原などでも黒く焼け残った焚き火の跡を見ることがあります

が、あれは余り焚き火が上手でない人の仕業。火を自在に扱えると、河原の石をススで黒く汚すこともないのです。

関根さんが選んだ場所は、丹沢のある溪谷の河原。焚き火の位置はなるべく乾いた地面を選びます。もちろん、頭の上に木の枝が張り出しているようなところは思わぬ火事を招く危険性があるので避けましょう。

薪割りから着火まで

場所を決めたら、まずはスコップなどで浅めの穴を掘ります。風向きを確かめ、風の流れに沿った長方形の穴を掘るので。このときに、風下側の短辺を垂直に20センチほど掘り、風上側の短辺からは緩やかなスロープ状になるように掘るのがコツ。こうすると、一定の方向から風が入るので火の勢いが安定するし、よいな方向からの風を防ぐことで火の保温効果が生まれ、より燃えやすくなります。

燃料の薪ですが、今回は持参してきたものを使います。関根さんが指示した薪の量は、針葉樹(スギやヒノキなど)と広葉樹(ナラヤクヌギなど)を一束ずつ。針葉樹の薪は火が付きやすく燃えやすい分、短時間で燃え尽きてしまいます。一方の広葉樹の薪は密度が高くてすっしりと重く、同じ体積の針葉樹の倍に近い重さがあります。火付きはよくないものの、一度火がつくと長時間ゆつくりと燃え続ける火持ちの良さが特徴です。火を起こす際に必要な焚き付け材は、